

Hop Step Jump

③

初任者研修第 4 回

児童生徒理解を深めるために①
アンケートの感想から

今回のテーマは『児童生徒理解を深めるために①』。講師の先生は、NPO法人ラヴィータ研究所 子ども発達相談センター・リソース「和」所長、米田和子先生でした。支援教育に造詣が深く、豊能地区の学校でも実践的な助言をいただいている先生です。大学の時に先生の講義を受けたことがある先生や、現勤務校で直接お話を伺ったことのある先生もいたようです。

子どもたちの「できない」ところを表面的に見て怒ってしまっていたなと感じました。その子の背景を捉え、その子に合った支援の方法を考えなくてはいけないと感じた。全員がわかりやすい授業を心がけること、個々の実態に応じた支援を心がけることが大切だと感じた。

何回も同じ注意をされる子を、ともすれば「困った子」と思いがちですが、実は教室の中で「困っている子」なのかもしれません。その困り感や負担を私たちが理解し工夫することで軽くしてあげられるかもしれません。教室をよく見れば確かに思い当たる子はいるようです。

色々な例を聞きながら、我がクラスにいるいると心当たりをたくさん見つけました。その子たちにどう手立てをしていくか、これからもっと深く勉強していきたいと思いました。とにかく、明日からでも始められそうな事例をたくさん教えていただきました。結局は 1 人 1 人の子どもをよく見る事が一番大事だと心に留め、明日からの学級指導につなげていこうと思います。

ユニバーサルデザインという言葉は知っていた。「すべての子どもが分かる授業」は、教師が目指すべき授業であると思います。今日の話聞いて支援とは、すべての子どもが必要としているのだと思います。それが顕著に見える子、見えにくい子、様々ですが、見逃さない目を養いたいと感じました。私は子どもが思考する授業、そしてつながり合う授業を目指しています。自力で分からなくても思考できるようにしたい、しかし、それでも全ての子どもにフェアな学習(分かる)ができるように指導していこうと思います。ありがとうございました。

すべての子どもの学びを保障することは公教育の使命。すべての子どもが安心して学びひたるための環境への道しるべがユニバーサルデザインの授業の中にあるかもしれません。

授業を落ち着いて聞くことができない子どもたちに、「静かにしなさい」「しゃべらない！」と注意する前に、ユニバーサルデザインを使って、視覚、聴覚で指示することの重要性を認識することができた研修でした。

私の行っている授業は、話しすぎ、書きすぎの情報が多すぎるものだったと痛感しました。視覚への訴えを用いて工夫していきたいと思います。最後の映像で見た授業に衝撃を受けました。いつも私は授業がうるさい時は、怒る、注意するということしかしてきませんでした。ですが今回工夫次第で全員が気分良い状態で静かにさせられるのだなと気付きました。先生の訓練？(生徒への教育)などもありますし、小学校と中学校では違うと思いますが、自分なりの方法を見つけていきたいです。

「それでいいんだよ！」という言葉が印象に残った。毎日“できないこと”が続く子をしかり続けている最近の自分を反省した。もっとたくさんのできている子をほめてあげたい。短的確な指示、パターン化された流れなど、とても勉強になった。

授業だけでなく、学級、学年の経営においても中長期的な計画のもとに、節目節目で評価しながら進んでいかなくてはなりません。10月の学びをデザインし、そこに向けて4月から積み上げていきます。

学びあいの環境を作ったり、一問一答ではないクラス作りの例を画像で見ることが出来、イメージを作ることが出来ました。『支援を与えてばかりではなく、ぬいていって出来るようにしていってあげる』という感覚がなく、ずっとそのままにしてしまっていたので、子ども達が自主的に動けるように工夫していきたいと思います。

それぞれの特性を否定するのではない、ゴールへ導いていきたいものです。